

視聴覚教育

NO 116

発行日
60.10.9 行岡崎市AVL
編集
広報委員会

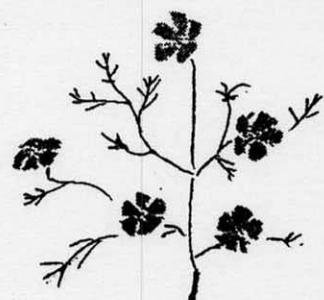
こうした動きに使乗するかのように、産業界も一気にマイコンを学校へ導入しようととしている。動きがあまり急激なだけに不安が伴う。かつて学習内容や指導方法が十分検討されないまま導入されたシート学習機器に反発現象が起つたことの二の矢張りみかねない。

マイコンの教育利用については、大きく二つを考えられている。そのひとつは、「CIA」と呼ばれ、教師や指導者が学習指導のための教具として利用したり、学習者が自らの学習のために利用する方法である。ひとつとは、「COM」と呼ばれ、学習指導の過程で行うべきための情報処理や、学校経営のための事務・教務などの情報処理に利用する方法である。

これらの利用については、まだ摸索の段階であり、今後の大きな研究課題である。そこで私たちは、この新しいメディアに対し、

「人間・居住・環境と科学技術」をテーマに開かれていた科学万博は、九月中旬、その幕を閉じた。映像博とか口博、ホット博とか陰口をたたひたものの、ハイテクノロジー社会の姿を描き出すことは成功したと思つ。その技術的な支えとなつたのはコンピュータであり、偉力をいかんなく發揮した。

そのコンピュータは、教育の場へも急速に波及をし始めている。文部省の積極的な取り組みは、目を惹かせるものがある。昭和五八年五月の実態調査に始まつ、社会教育審議会の手による「教育におけるマイクロコンピュータについて」の中間及び本報告、初等中等教育局の具体的利用を検討するための調査研究協力者会議の発足（六〇年二月）、そして助成局は今年度予算に補助経費を新たに計上、等々、枚挙にいとまないほどである。



読みどつを助けるために

“情報化システムを生かした教育”

矢丸中 後藤晶基

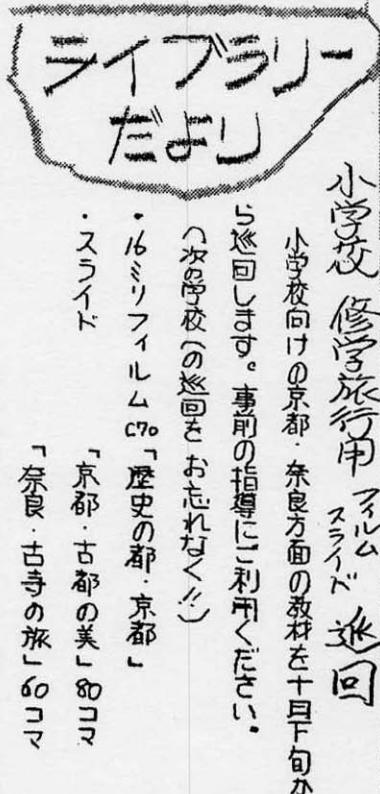
三島小 八田昌子

昨日の「あじわひだり」は、テレビから情報を得ることが多かった。リスム感のある音声、視覚から迫力ある演技や画面、刺激的な描写に慣れ育てられてしむる、いる現在である。

とくに、文章を読んでイメージ化することにつけて、苦手な子が多い。文を読むことができるから、文を頭だけを読みこむよりも読み味わうような表現(朗誦)をすることができる。実際にそのひのイメージ化していとは限りないし、それが出生する力となると非常に疑問が多い。

読み書きなどで物語などの読みどつを図のなかに努力しているが、個人差がつくることが多い。国語教材では、最後の読みどつを教えるべきである。読みどつによりイメージをもつてさせ画面に表すことをためらう。文書にも表せない行間の部分を、心の中でもれなく想像してみる。こんなことを、わたしは「頭の中をナレーションにならすこと」といふ。

テレビ化することは、イメージ化する手段であるが、何の根柢のないところを離してしむる、導入部などでのこしえを大げししたり、テープを入れて動的に扱うことで効果があった。



パソコン利用学習として、東京の田園調布小では五、六年の児童が「パソコンを使つて図鑑や地図・アニメーションに挑戦していた。「パソコンをして人間的な触れ合ひを…」と言われる鈴木先生、「あえる」ことが樂しい、集中力がついた」という児童の姿が印象的であった。ナショナル・アーレンセンター・富士通では、ニードルニアといわれる機器やそのシステムに感心したり驚いたりした。とくに教材ソフト「ぐくつの支援システム」(例えは「ストーリーステム」)はその一つである。また、これから学校を中心普及するのが、CD-ROM(コンピュータ・ディスク)とパソコンのシステム化であるといつてよい。母鳥の巣にどのくらいの機器操作の研修がより重要なことがあるものと痛感した。

小学校修学旅行用 スマホ巡回

小学校向けの京都、奈良方面の教材を十冊下旬から巡回します。専門の指導にご利用ください。

(次回)の巡回をお忘れなく!!

・16GBファイル「歴史の都・京都」

・スマートフォン「京都・古都の美」のコマ

「奈良・古寺の旅」のコマ